

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370007

研究課題名(和文) ウィトゲンシュタインのアスペクト論を通じた中期から最晩期への思想変遷の解明

研究課題名(英文) The elucidation of the transition from the middle Wittgenstein to the last through the analysis of aspect perception

研究代表者

山田 圭一 (Keiichi, Yamada)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：30535828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、(1)後期ウィトゲンシュタインが考察していたアスペクト知覚(～として見る)がどのような特徴をもつ知覚であるのかを通常の知覚との対比のもとで明らかにするとともに、(2)アスペクトの転換において変化しているものが何であるのかを概念的なアスペクトと非概念的なアスペクトの区別を踏まえて明らかにした。

そして以上の二つの成果をもとに、(3)ウィトゲンシュタインの思想的展開のうちでアスペクト知覚の議論どのような役割を果たしているのかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： In this research, I clarified (1) what is the feature of the aspect perception (seeing as) which Wittgenstein had considered in his later thought in contrast with the normal perception, and elucidated (2) what changes by aspect-switching on the analysis of the difference between conceptual aspect and non-conceptual aspect.

And, on the basis of the above two research outcome, (3) I considered what sort of significance the argument of aspect perception had for the transition of Wittgenstein thought.

研究分野：分析哲学

キーワード：ウィトゲンシュタイン 知覚 知識 アスペクト 懐疑論 概念

1. 研究開始当初の背景

2000年にウィトゲンシュタインの遺稿データベースが完成したことによって、彼の思想の変遷についての研究が近年再び本格化してきている。私はこれまで、後期の『哲学探究』(以下、『探究』と省略)執筆後のウィトゲンシュタインの思索を、前期・中期・後期につづく「最晩期のウィトゲンシュタイン」として一つの独立した思想期と捉え、そこで示されている知識と確実性との間の関係を現代知識論のアイデアと結びつけながら「ウィトゲンシュタインの知識の哲学」を抽出してきた。

以上の研究によって、ウィトゲンシュタインの前期・中期の思想と最晩期の思想との間の関係については一定の見通しが与えられた。そこで、後は残された「中期と後期との関係性」と「後期と最晩期との関係性」をそれぞれ明らかにすることによって、ウィトゲンシュタイン哲学の全体像を示すことができるのではないかと考えるに至った。

この課題に取り組むために私が着目したのが、後期の『探究』第二部で展開される「アスペクト知覚」を巡る考察である。アスペクト知覚とは、たとえば「アヒル-ウサギ図」のような多義図形を「ウサギとして見る(seeing as ~)」という知覚のあり方である。彼のアスペクト論自体は中期の『哲学的考察』(以下、『考察』と省略)にまで遡ることができるが、この議論を彼の思想史的な変遷のうちに位置づける研究はこれまで存在しなかった。

(1) 私はこの問題に対して、まずアスペクト知覚を否定可能性のもとでの知覚(アヒルではなくウサギとして見る)のあり方として捉えることによって、アスペクト論を前期から最晩期に至る命題の否定可能性を巡る議論の系譜につなげられるのではないかと考えた。

(2) そして、反転図形のアスペクト知覚において知覚される「図」と背景として退く「地」という「図地」関係は、言語ゲーム中で語られる事実と言語ゲームを支える事実との関係と類比的に捉えることができるのではないかと考え、後期から最晩期への続く「語られることなき確実性」についての考察の系譜のもとでアスペクト論を捉えることができるのではないかと考えた。

(3) また、私はFish, W. (2010), *Philosophy of Perception*, Routledgeの監訳(『知覚の哲学入門』として勁草書房より2014年刊行)する過程で獲得した現代分析哲学における知覚の哲学の研究成果や多義図形の知覚についての心理学的な研究の成果を知るに至った。そこで、これらの成果と、私がこれまで蓄積してきた現代知識論における成果などをウィトゲンシュタインのアスペクト論と比較検討することによって、「ウィトゲンシュタインの知覚の哲学」という新しい研究領域を切り開くことができるのではない

かという着想を得た。

2. 研究の目的

本研究の目的は、()ウィトゲンシュタインが『哲学探究』第二部で展開したアスペクト知覚についての考察(以下、「アスペクト論」と省略)を、彼の中期から最晩期の思想変遷過程のうちに位置づけること、そして()その洞察の現代的な意義を明らかにすること、の二点にあった。

()については、後期のアスペクト論を中期の「文法体系」の議論や最晩期の「確実性」の議論と比較検討し、「語られるアスペクト」と「語られぬアスペクト」という二つの観点から彼の思想的変遷の過程を明らかにする。

()については、彼のアスペクト論の独自性を、現代の知覚の哲学、知覚心理学、現代知識論の成果と比較検討することによって明らかにし、そのことを通じて「ウィトゲンシュタインの知覚の哲学」を析出することを試みた。

3. 研究の方法

ウィトゲンシュタインのテキストの読解と分析としては、まず中期の『考察』(1929-30)とBig Typescript(1933-)における「Aspekt」概念の来歴を辿り、そこでの現象学的考察の背景を明らかにした上で、「熟知性(Wohlbekanntheit)」と結びつけて論じられる中期のアスペクト論の特徴を分析する。次に、後期の『探究』第二部(1946-49)のアスペクト論を、その草稿となった『心理学の哲学1、2』やLast Writings on the Philosophy of Psychology, vol. などのテキストにまで遡って、その考察の背景と課題を明らかにする。

以上のウィトゲンシュタイン研究の成果を、現代の知覚の哲学や知覚心理学におけるアスペクト転換の議論と比較することを通じて、ウィトゲンシュタインの知覚の哲学の独自性を明らかにする。加えて、絵画知覚に関する理論との対比を通じて、アスペクト知覚の二面性を明らかにしていった。

上記の研究成果を検討するために、若手ウィトゲンシュタイン研究者との勉強会、現象学者や分析美学の研究者との科研の研究会、知覚の哲学の研究者の勉強会などで、研究成果を発表しながら、ウィトゲンシュタイン解釈の妥当性を吟味していくとともに、彼のアイデアの現代的な応用可能性について検討していった。

4. 研究成果

一年目は、まずウィトゲンシュタイン研究として『哲学探究』第二部および『心理学の哲学1』『心理学の哲学2』といったテキストを中心に精査するとともに、現代の知覚の哲学におけるアスペクト転換に関する研究や認知心理学のカテゴリー論などの研究を参考にしながら、後期ウィトゲンシュタイン

のアスペクト論を現代的な道具立てのもとで分析することを試みた。

具体的には、大きく分けて(1)通常の知覚(～を見る)とアスペクト知覚(～として見る)の共通点と相違点は何か、(2)概念的なアスペクトと非概念的なアスペクトの区別と関係性はどのようなものか、(3)アスペクト転換について変化するのは何か、といった問題について考察した。

その研究の結果として、(1)については現実を見る通常の知覚と、可能性のもとで見るアスペクト知覚という様相の対比があること、(2)についてはゲシュタルト心理学的な体制化の変化と区別されるカテゴリー化の変化があること、(3)アスペクトの転換には(2)の違いに応じた二つの変化があり、ウィトゲンシュタインが重視した後者の変化は「意味」の変化と捉えることができること、を明らかにした。

二年目は、一年目のウィトゲンシュタインのアスペクト知覚の議論に関する文献的な研究の成果をもとに、彼の知覚の哲学の独自性と特徴を現代の絵画論、知覚心理学、知覚の哲学の道具立てを借りながら明らかにした。

ウィトゲンシュタインは「純粹に視覚的なアスペクト」と「概念的なアスペクト」という二つのアスペクトの区別を行っている。前者はゲシュタルト心理学が扱っていた「体制化」に相当し、現代の知覚の哲学ではアスペクト転換の現象的な性格の変化に対応する非概念的な表象内容として論じられているものである。後者はウィトゲンシュタインが「類似性を見る」という際に考えているアスペクトであり、こちらのアスペクト知覚においては対象のカテゴリー化が行われている。このような分析を踏まえて、アヒル-ウサギ図においてこの両者のアスペクトがどのように重なり合っているのかを絵画知覚の二面性という観点から明らかにするとともに、概念的なアスペクトにおける概念を家族的類似性のもとで捉えなおすことによって、ウィトゲンシュタインの概念観の特徴とそれが知覚においてどのように反映されているのかを明らかにした。

最終年度は、一年目、二年目の成果をもとにウィトゲンシュタインが論じているアスペクト知覚とはどのような知覚であるのかを改めて定式化するとともに、アスペクト知覚についての議論が彼の思想全体を貫くどのような課題と結びついているのかを考察した。

その結果として、アスペクト知覚がある対象についての否定可能性の理解を背景とした知覚である(ウサギではなくアヒルとして見る)ことを明らかにするとともに、どのような否定可能性との対比のもとで捉えるのかによって、その対象について語る言語ゲームが異なってくるという点を、記述の体系に応じた言語ゲームの多元性という中期以降

のウィトゲンシュタインの思想のもとで捉え直した。そのうえで、そのような各言語ゲームの出発点となる熟知の対象が「そうでしかありえない」仕方と与えられるという原初性を有していることを明らかにし、ウィトゲンシュタインが提示したアスペクトの恒常的な見え(～を見る)とアスペクト知覚(～として見る)の対比を、与えられるものの原初性と多層性という観点から捉え直した。

そして以上の対比が、最晩期の『確実性について』で扱っている懐疑論においても適用できることを明らかにし、懐疑論が新たな世界の見方を提案することによってわれわれにある種のアスペクト転換を促す議論であることを明らかにした。

本研究では以上の考察を通じて、ウィトゲンシュタインの中期から最晩期の思想の連続性を解明するとともに、彼の知覚の哲学と知識の哲学との連続性を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

山田圭一、「与えられるものの原初性と多層性 アスペクト論と懐疑論はいかにしてつながっているのか」、荒畑・古田・山田編『これからのウィトゲンシュタイン—刷新と応用のための 14 篇』(リベルタス出版)、116-132 頁、2016 年。

山田圭一、「言葉の意味ってなんだろう ウィトゲンシュタインの『青色本』、『哲学探究』」、直江清隆編『高校倫理の古典でまなぶ 哲学トレーニング 1』(岩波書店)、136-147 頁、2016 年。

Keiichi Yamada, "What is Wittgenstein's view of knowledge?", 千葉大学人文社会科学研究所, 33 号, pp. 16-27. 2016.

山田圭一、「高校公民科における知識・思考・対話の関係をどう考えるべきか」、『倫理学年報』(日本倫理学会) 第 65 集、19-29 頁、2016 年。

山田圭一、「アスペクトの転換において変化するもの」小熊正久・清塚邦彦編著『画像と知覚の哲学』, 東信堂, 205-223 頁、2015 年。

[学会発表](計 10 件)

山田圭一、「ア priori な概念分析とはどのようなものか」、第 9 回社会学互助会、名城大学(東京都世田谷区) 2016 年 12 月。

山田圭一、「哲学教育における対話の意義と位置づけ」、静岡哲学会、静岡大学(静岡市) 2016 年 11 月。

山田圭一、「哲学を教えるってどういうこと?」、東北哲学会、東北大学(仙台市)、2016年10月。

Keiichi Yamada, "What is Wittgenstein's view of knowledge?", Workshop on Knowledge in Interaction, 政策大学院大学(東京都港区), 2016年3月。

山田圭一、「規範性・個別性・原初性・他者性の逆襲」、フッサール研究会、東海大学(東京都港区)、2015年12月。

山田圭一、「知覚と言語が邂逅するとき - 「アスペクト盲と隠喩的想像力」再考」、KNS研究会、東北大学(仙台市)、2015年12月。

山田圭一、「高校公民科における知識・思考・対話の関係をどう考えるべきか」、日本倫理学会、熊本大学(熊本市)、2015年10月。

山田圭一、「概念的アスペクトと非概念的アスペクト」、表象媒体の哲学研究会、キャンパスイノベーションセンター(東京都千代田区)、2015年1月。

山田圭一、「哲学はいかに一枚岩ではないのか」、応用哲学会、東北大学(仙台市)、2015年4月。

山田圭一、「私が世界について語りうるためには何が必要か」、日本哲学会、北海道大学(札幌市)、2014年6月。

〔図書〕(計 2 件)

荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也編、『これからのウィトゲンシュタイン—刷新と応用のための14篇』、リベルタス出版、2016年。

フィッシュ, W. 『知覚の哲学入門』、山田圭一: 監訳、源河亨・國領佳樹・新川拓哉: 訳、勁草書房、2014年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:

権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田圭一(Yamada Keiichi)

千葉大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号: 30535828

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()